

5. 医薬品

トピック：
病院・調剤薬局が後発薬の使用を拡大

国内医薬品市場動向：
市場拡大が鈍化

国内製薬大手の業績：
2014年度は増収減益で着地、2015年度は増収増益の見込み

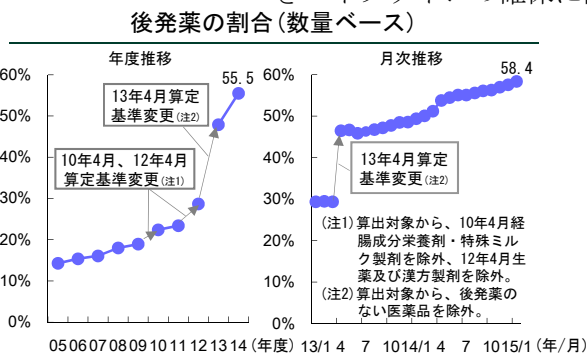
今後の見通し：
業績の二極化が進む中、活発な買収の動きは続く

製薬企業の主要顧客である病院・調剤薬局では、2014年度診療報酬改定を受け、診療報酬上のインセンティブを得ようと後発薬の使用割合を拡大しています。今後をみても、政府は医療費の削減のために後発薬の使用を推進し、2020年度までに後発薬比率を80%超に引き上げるとしており、後発薬への切り替えが更に進むとみられます。

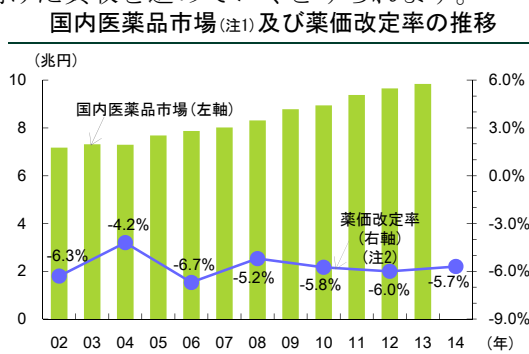
国内医薬品市場をみれば、高齢化の進行や生活習慣病の増加等に伴って一人当たりの医薬品使用額が増加し、市場規模の拡大が続いてきました。もっとも、2014年については、薬価改定や後発薬への急速な切り替えの影響から、市場規模の拡大が鈍化した模様です(注)。(注)2014年度の薬価改定では既存薬の薬価は全品目平均で▲5.7%(実質改定率、消費税増税分上乗せ後では▲2.7%)引き下げられました。

2014年度の国内製薬大手8社の売上高は、特許切れした製品の売上高が後発薬への切り替えにより減少したものの、国内外での新薬の販売拡大や円安等が寄与し、前期比+2.9%増加しました。一方、営業利益は、大手の一社で多額の訴訟関連費用が計上された影響を除いても、薬価改定の影響や、販売促進費や研究開発費の増加等により利益率が低下、減益となりました。2015年度は、国内外での新薬の販売拡大等により前期比+3.6%の増収となる見込みで、営業利益は、増収の影響に加えて、研究開発費等の経費削減が継続されること等により、前期の訴訟関連費用の影響を除いても、増加するとみられています。

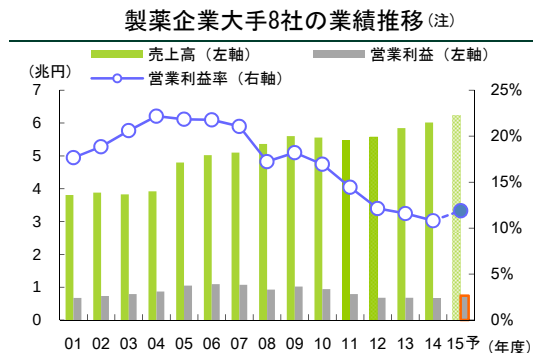
製薬企業毎の業績をみれば、大型新薬の上市が進んでいる先では堅調に推移している一方、長期収載品比率の高い先では後発薬への切り替えの加速等から低調となっており、二極化が進んでいます。今後をみても、有望な開発パイプラインを継続的に確保できるか否かが業績を左右するとみられ、各社は、引き続きパイプラインの確保に向けた買収を進めていくとみられます。



(出所) 厚生労働省「調剤医療費(電算処理分)の動向」より弊社作成



(出所) 厚生労働省「薬事工業生産動態統計年報」より弊社作成



(出所) 各社決算短信より弊社作成(アステラス製薬、エーザイ、塩野義製薬、第一三共、大日本住友製薬、武田薬品工業、田辺三菱製薬、中外製薬)、アステラス製薬等5社はIFRSを採用している
 (注) 14年度営業利益は、武田薬品工業の訴訟関連費用を控除して算出。15年度営業利益予想は、アステラス製薬及び中外製薬ではコア営業利益を使用。

海外企業買収事例(2013年9月～2015年6月)

発表時期	企業名	対象企業				金額
		企業名	目的(注1)	本社		
13/9	大塚製薬	Astell Pharmaceuticals	開	米		8.9億ドル
13/10	アステラス製薬	Mitokyne	開	米		7.3億ドル (注2)
14/2	大日本住友製薬	Edison	開	米		2.1億ドル (注2)
14/5	参天製薬	Merck	販	米		約6億ドル (注3)
14/6	Meiji Seika	Medreich	製	印		2.9億ドル
14/7	協和発酵キリン	Archimedes Pharma	販	英		2.3億ポンド
14/9	第一三共	Ambit Biosciences	開	米		4.1億ドル (注2)
14/12	大塚製薬	Avanir Pharmaceuticals	開	米		35.4億ドル
15/2	そーせいグループ	Heptares Therapeutics	開	英		4.0億ドル (注2)
15/2	武田薬品工業	Toplam Kalite	販	トルコ		約145億円 (注2)

(出所) 各社プレスリリースより弊社作成(買収金額100億円相当以上)
 (注1) 開=開発パイプライン強化、販=販路・製品ラインアップの強化、製=生産強化
 (注2) マイルストーンを含めた最大価額 (注3) 眼科用医薬品のみ